説教20220424　詩編126編　ヨハネ21：1-14「愛する人は現れる」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日のヨハネ福音書の箇所をお読みになって皆さん、ルカ福音書の５章に記されているイエス様が漁師を弟子にする話を思い出されないでしょうか。

「イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。」と始められるそのお話は、「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」というかたちで結ばれています。

今日の聖書箇所を読むと、何か聞いたことがあるような、というデジャブ感と共に、ルカ福音書５章が思い起こされますが、実はその結末はこの様に全く違うのであります。

「魚があまりに多くて、もはや網を引き揚げることが出来なかった」というヨハネ福音書の記述は、「おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった」というルカ福音書の記述を念頭に置いているように思えます。ところが、ヨハネ福音書での結末は、弟子たちがイエス様から「さあ、来て、朝の食事をしなさい」という言葉に促されて、イエス様と共に朝の食卓の席につかされるという事でした。一方でルカ福音書での結末は、イエス様の「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」という言葉に従って弟子たちは、すべてを捨ててイエスに従ったのであります。

さて、イエス様が漁師たちを弟子にしてから、今日の、イエス様と弟子たちが朝の食卓につかされる迄には、３年の年月が流れています。その間、弟子たちはイエス様と行動を共にするわけですが、その弟子たちの心境を短く言い表すならば、「種の袋を背負い、泣きながら出て行き、涙と共に種を蒔いた」のではないでしょうか。私たちも主なる神からの召命を受けて働くとき、その基調となる心境はそういうことだと思います。ヘブライ人への手紙 12章 11節でも「およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです」と言われている通りであります。

そうして３年の年月が経ち、弟子たちは遂に、「束ねた穂を背負い　喜びの歌をうたいながら帰って来て、喜びの歌と共に刈り入れ」たのであります。

イエス様と共に朝の食卓につかされるというのは、まさに喜びそのものでありますが、この喜びの話が、ヨハネ福音書２０章30節からの、「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」と言う記述の後に記されている事にも私たちは留意したいと思います。つまりヨハネ福音書は、この順序でイエス様と共に在る喜びを語ることによって、それが、弟子たちだけに留まる喜びなのではなくて、後に続く時代の全ての人々に開かれた喜びであることを物語っているのです。

もう一言申し添えておきますと、イエス様は時の流れそのものを作り出し支配されているお方ですから、私たちが通常思い描くような、３年の労苦の後の結果としての幸せという様に簡単には割り切れないような、あふれ出る大きな喜びをも聖書は記しています。ヨハネ福音書4章 34節から、「イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。」

共に喜ぶという事は、労苦しているはずの種を蒔く人も刈る人も、実は、共にイエス様と朝の朝食に招かれて食事をし、共に喜び祝う者とされている、ということです。

この様にどんな労苦に伴う悲しみも、時間の流れを越えて、喜びに変えて下さる、イエス様は本当に素晴らしいお方であります。そのようなイエスさまを私たちが、毎朝の食卓にいつもお招きすることが出来ますようにと、祈り願います。

さて、先週の説教で、イエスが愛された弟子、それはヨハネのことであろうと目されていますが、その愛弟子が今日も出て参ります。それは２１章７節であります。「イエスの愛しておられたあの弟子がペトロに、「主だ」と言った。」と記されています。愛弟子はペトロと同じく漁師でありましたが、ペトロと同時に、イエス様の弟子とされ、それからずっとペトロと行動を共にしたのでありましょう。そうして、イエス様が死んでしまった後にも、いっしょに漁をする仲へと戻ったのでありました。ですから愛弟子とペトロの間には、の呼吸で理解し合えるような親密さがあったのでしょう。愛弟子が先ず悟って、「主だ」とペトロに告げれば、ペトロはその愛弟子の一言によってそれが主イエスであることを信じたのでした。

愛弟子は、イエス様が復活されたことを、誰よりも先に知り、信じた、はじめての人間でした。その経緯は先週お話しましたけれども、愛弟子は、イエス様が葬られた墓の中に入り、アマ布から抜け出たイエス様の体がそこにないことを知り、それゆえにイエス様がどこか他の処で生きていることを信じたのでした。（ヨハネ20：8）

そうして、今日、愛弟子は、夜が明けたころ、イエス様が岸に立っておられるのをみて、最初はそれがイエス様だとは分からなかったけれども、魚があまりに多くかかって、網が引き上げられないでいる有様をみて、それがイエス様であることを知ったのであります。愛弟子はこのときどこに行ったか分からないイエス様の姿を追い求めていたのではないでしょうか。確かに、墓の中で愛弟子は、空になったアマ布の抜け殻から、イエス様の生きた体がどこかに居られることを確信したわけですが、それから、愛弟子はそのイエス様の体を常に慕って、追い求めていたのだと思います。そして、この朝、愛弟子は、イエス様の体を見たのですが、それがイエス様だとは分かりませんでした。しかしやがて、自分がイエス様に召し出された３年前の漁のときの大漁の有様が思い起こされ、それがイエス様であることを知ったのでした。

この様に、私たちが、やがて定められたときにイエス様と再会するのも、イエス様の生きた体との再会になります。今日の聖書箇所で153匹の網にかかった魚のことが記されていますが、それはイエス様に捕らえられた、世界中の多種多様な全ての人たちのことを言い表しています。

その魚たちは、イエス様と弟子たちの朝の食卓の食べ物となるのですが、それでは私たちはやがてイエス様たちに食べられてしまうのでしょうか。ちょっと怖い感じもしますが、やがて来たる完成された世界では、私たちの体も、死なない新たな形につくりかえられていると考えた方が良いでしょう。その新しい体を想起する為には聖餐式で私たちが頂く、キリストの体としてのパンを思い起こせばよいと思います。イエス様は、「取って食べなさい。これはあなた方に与える私の体である」という言葉と共に私たちにパンをお与えになります。この様に、イエス様も御自身を私たちに食べ物としてお与えになるのです。

この様に想起していきますと、今日、イエス様と弟子たちとが共にした朝の食卓は、私たちが新しい体を与え合いながら深くつながっていく、食事の有様を記しているのでしょう。

イエス様は御言葉であり、その御言葉が、人間の体をとって、私たちと共に歩んで下さっています。そのイエス様の体は、今、天の父なる神の右に座っておられ、私たちの目からは見えないところに居られます。だからこそ、私たちは、愛弟子のように、どこに行ったか分からないイエス様を探し求める者にされているのでありましょう。愛弟子たちがそのようにイエス様の姿を探し求めている時に、イエス様が、体が無い幽霊のような者としてではなく、ちゃんと体を伴った一人のお方として来られたという事は、大いなる喜びであります。体を持つ存在であるからこそ、私たちは再会したイエス様と、お互いを与え合う食卓に再びつくことが出来るのです。

愛弟子やペトロが、元の漁師の営みに戻った、という事は、一見、全てが振り出しに戻ってしまったような印象を与えますが、実はそうではありませんでした。彼らは、イエス様と共に「種の袋を背負い、泣きながら出て行き、涙と共に種を蒔い」て来ましたので、たとえ、自分たちが、イエス様が死んでしまったと思い込んでガッカリして、元の家業に戻ってしまっていたとしても、そんな彼らをイエス様の方がほっては置かれなかったのです。イエス様は彼らの処に再びやってこられて、彼らを朝の食事へと引き寄せて下さったのです。

イエス様について行くという事は、イエス様の御言葉を常に聞きながら、その御言葉に従っていくという事であります。が、それと同時に、今日示されましたように、毎朝、イエス様と共に食事の席に着くという事であります。その食事の席で私たちはイエス様の体と親しく交わるのであります。私たちが新たにつくり変えられる死なない体と言うのは、イエス様が制定された、聖餐式において、私たちが地上生涯の最後の時まで、御言葉と共に与えられるパンと葡萄酒を味わっていくことによって、ますます深く知られていくことでしょう。

私たちは、時間の流れに従って、より明らかに示されていく、体のよみがえりという恵みを、日々の食卓においても味わいながら、永遠の命の道をイエス様と共に歩んで参りましょう。そのように心を尽くしてイエス様を食卓にお迎えする時、私たちがこの世でどんな苦難のときを迎えていようとも、その食卓のときをイエス様が祝福し、喜びの歌と共に刈り入れる収穫のときと変えて下さいます。

私たちはそのように信じ、希望を大きくし、愛し合うことを続けながら、生活をして参りたいと願います。

お祈りします。

天の父

あなたは、御子をよみがえらせ、私たちと共に、毎朝の食事につかせて下さいます。どうか私たちが心を尽くしして御子を

この世には多くの苦難があり、あなたからの召命を受けて日々働く私たち一人ひとりひとりは、涙と共に種を蒔く者であります。しかし、あなたはいつも私たちを朝食に招いて下さり、喜びの歌と共に刈り入れる者としてくださいます。その日々の御言葉の計り知れない恵みに感謝し、あなたに讃美を捧げます。

ことに、今日別府不老町教会で御奉仕されておられる竹井真斉先生に、あなたの守りと祝福が豊かにあります様に。牧会されている、宇佐教会、豊後高田教会、杵築教会があなたの栄光を豊かにあらわしていくことが出来ますように。

今、災害や災難に遭い、救助を求めておられる方々、殊に知床で遭難された方々を覚えます。主よ、どうか救いを御手を差し伸べて、その方々を救ってください。癒しと憐みの霊によって、あなたの生きる体に引き寄せて下さい。

主よ、今戦争や争いに巻き込まれ、愛する人を失い、傷つき悩み苦しんでいる方々を顧み、希望と生きる勇気をお与えください。あなたの正しい支配のうちに、人々が憎しみや傲慢の念を捨て去り、あなたの平和のうちに憩う者とならしめて下さい。

主よ、新型コロナ渦にあって、外出が制限され、自由を奪われて悩み苦しんでおられる方々を顧みて下さい。どうか、あなたが人々を隔てている隔ての壁を打ち砕き、私たちが新しい復活の命に生きることが出来るように、私たちを日々つくり変えて下さい。

父と聖霊と共に一体